



門 1 4
600
卷 212

書山齋

說小字



張吉靖

淳于棼家廣陵。宅南有古槐。生豪飲其下。因醉
致疾。二友扶生歸。憂二玄衣使者。曰。槐安國王
奉邀。生隨二使上車。指古槐入一穴中。大城朱
門。題曰大槐安國。有一騎。傳呼曰駙馬遠降。引
生升廣殿。見一人衣素練。服朱華冠。令生辨王
王曰。前賢尊命。許令女瑤。若奉事君子。有德姬
數十。奉樂執燭。引身金翠步障。珍瓏不斷。至一
門。踰金儀宮。一女子踰金枝公主。儼若神僊。交
驩成禮。情禮日洽。王曰。吾南河郡政事不。見

卿爲守。勅有司出金玉錦綉。僕妾車馬。施列廣
衢。錢公主行。夫人戒子曰。淳于郎性剛好酒。爲
婦之道。貴在柔順。爾善事之。生累日至郡。有官
吏僧道。音樂來迎。下車省風俗。察疾苦。郡中大
理。凡二十載。百姓立生祠。王賜爵錫邑。位居右
輔。生五男二女。榮盛莫比。公主遇疾而薨。生請
護喪赴國。王與夫人素服。慟哭於郊。備儀羽葆
鼓吹。葬主於盤龍岡。生以貴戚。威福日盛。有人
上表云。玄象譎見。國有大恐。都邑遷徙。宗廟崩
壞。事生蕭牆。時議以生僭侈之應。王因命生曰。
卿可暫歸本里。一見親族。諸孫無以爲念。復令
二使者送出一穴。遂寤。見家僮擁篲于庭。二客
濯足于榻。斜日未隱。西垣餘尊尚湛。東牖因與
二客尋古槐下穴。洞然明朗。可容一榻。上土壤
爲城。廟臺殿之狀。有蟻數斛。二大蟻素翼朱首
乃槐安國王。又窮一穴。直上南枝。群蟻亦處其
中。卽南柯郡也。又一穴盤屈若龍蛇狀。有小墳
高尺餘。卽盤龍山岡也。生追想感歎。遷還擁篲。
是夕風雨暴發。旦視其穴。遂失。羣蟻莫知所之。
國記有大恐。都邑遷徙。此其驗矣。

槐宮記ハ淳于棼が故事ナリ。陳霸嘗勢が夢ニ嫁シテ榮枯得
 喪ノ理ヲ推ユト。沈既濟が枕中記ニ一般。皆是寓言トイハル。夢
 昧ヲ醒スニ足レリ。予モ亦取コトアツテ。三勝半七が奇編ヲ述
 名ケテ三七全傳南柯夢ト謂事ハ米谷山ノ南柯ニ起テ
 千日寺ノ南无仏ニ畢ル。文辞荒唐ニシテ。君子ノ一喙ヲ惹ニ似
 然氏艶曲淫奪ノ脚色ヲ借ラヌシテ。勸懲ノ微意毎巻ニ
 存ス。閱者ノ利害彼ト此ト如何。因テ數行ヲ巻端ニ
 題スト云

文化四年丁卯夏孟 飯台 簾笠隱屋



總目錄

卷の一

深山路の楠

木精の怪異

丹波都が傳

卷の二

稚児の頻夫

櫛坂の佞人

大柏の權輿



米谷山楠樹

櫻子よりの

楠の姿

いそぐ

卷の三

臥房の胡越

華洛の僑居

夜輪の驟雨

卷の四

真葛が朝風

百度の願事

夜半の月魄



浪速津長所

果をの

海之音

言水

卷の五

霽後の宿の上

霽後の宿の下

主あられ園の元

卷の六

橋下の歌船

長町の五味

千日寺の柩



千日寺古墳

夢の音

墓茶

嵐雲

尾末夜通姑魯

あねさん
赤根羊七



策敏乃賣紹安

りんさん
笠屋三勝



既流便乃民



笠松平三

於途我休度



赤根善六

菊 野 陀 能 以 鷓



敷浪

可 多 巴 迺 芝



園花

姓氏

世家

續井順昭

續井吉維

列傳

厚倉友春

蟻松典膳

今市全八郎

布谷九郎

赤根羊六

赤根羊七郎

丹波市

笠松平三

蟻松曾右郎

笠屋三勝

籙結

敷浪

園花

阿通

姓氏果

七全傳南柯夢卷之一

東都

曲亭馬琴編文

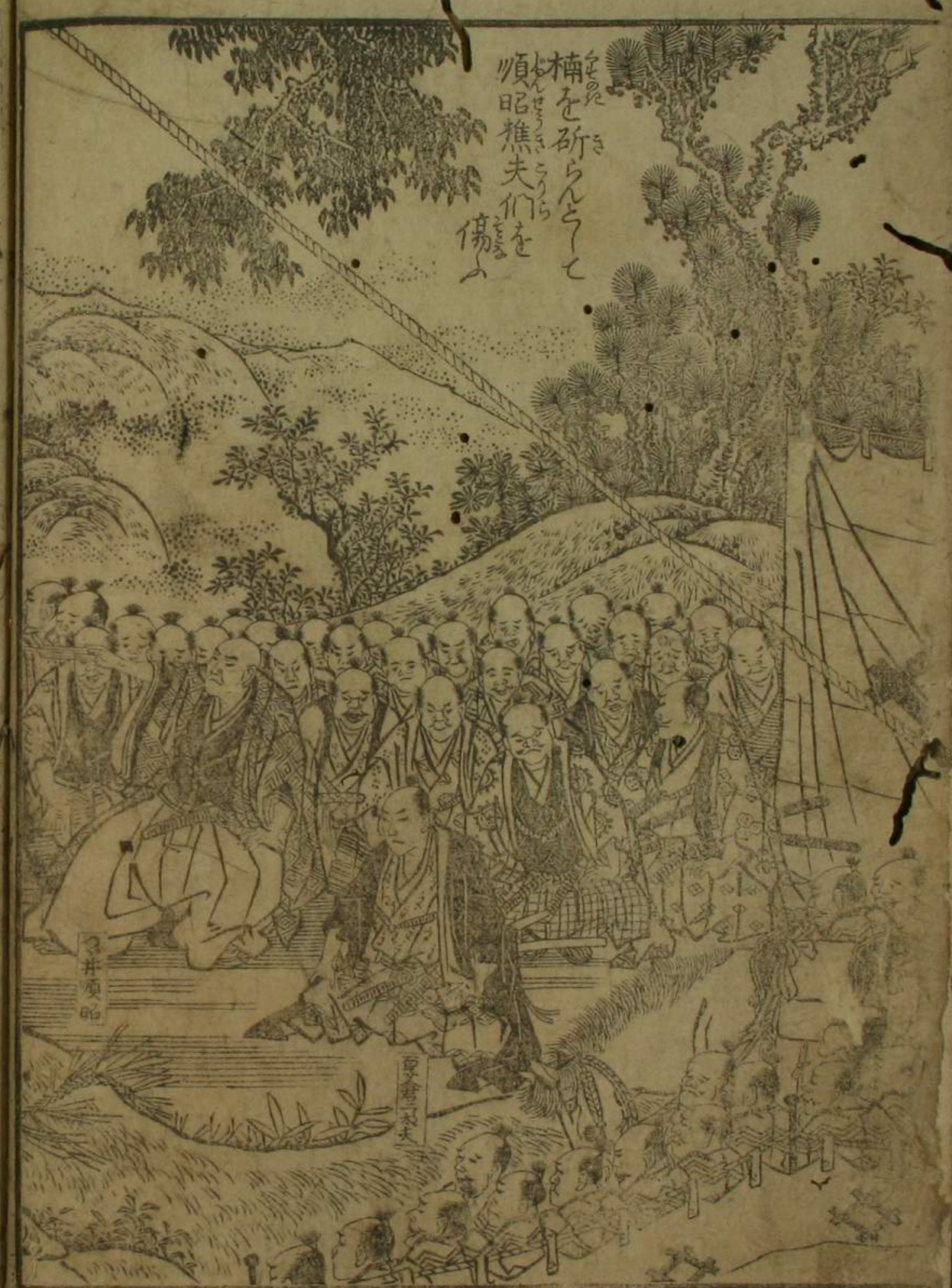
深山路の補

永正年中のゆくと。奈良の都に。続井順昭のつる。やんごたのり人おまをり
 たり。その先祖を尋ね。仏門より。武家と交参。法廷清家の立成を業
 たり。兵家開戦の六具を。事たり。建武の播乱。軍功拔群より。龍門
 比よ。武を備ふる。家謀と。順昭かく。家富昌。新よ。桂を利。茶亭を造
 る。珠を科。身よ。錦綉。美味。龍門の龍岩下の。



乳母子あつちうゆりりあつちう。厚倉あつちう二席あつちうを夫友春あつちうすくまあつちうく諫けるあつちう。怒持あつちう祠あつちうの梓樹あつちう
を伐陸亭あつちうの古木あつちうを倒あつちう。怪異あつちうは遇あつちう。唐山あつちうの書齋あつちう小記あつちう
。君もあつちうよあつちうありてあつちうぞあつちう中あつちうべたあつちう千載あつちうをあつちう授あつちうるあつちう樹あつちうもあつちう。是併あつちう樹あつちうの人あつちうり
。それあつちうをあつちう伐あつちうりあつちうの宗あつちうをあつちううあつちうけあつちうるあつちう。故奉あつちう。是あつちう併あつちう樹あつちうの人あつちうり
。殊あつちうもあつちうよあつちうのあつちう。天あつちうの驕奢あつちうをあつちう憎あつちうめあつちうるあつちう。後米あつちう管あつちうるあつちう楠あつちうも
。中興あつちうホあつちうがあつちう芥あつちうとあつちう脱あつちう。既あつちうよあつちう千載あつちうの大木あつちうとあつちうりあつちう。その木あつちう下あつちう宿客あつちうの
。頃あつちうとあつちうりあつちうをあつちう材あつちうとあつちうりあつちう伐あつちう透あつちうさあつちうるあつちうの深あつちうにあつちうありあつちうぬあつちうべあつちう。かあつちうらあつちうるあつちうのあつちう。くあつちうなあつちうも
。さあつちうひあつちうくあつちう。ああつちうつあつちう。後あつちうの患あつちうさあつちうらあつちうんあつちう。致あつちうとあつちういあつちうてあつちうもあつちうああつちうつあつちうとあつちう頃あつちう昭あつちう忽あつちう心あつちうをあつちう変
。さあつちうをあつちうれあつちう友あつちう春あつちうのあつちう。びあつちうがあつちうりあつちうのあつちう。みあつちうをあつちう供あつちうよあつちうりあつちうるあつちうべあつちう。物あつちうの宗あつちうとあつちうりあつちうとあつちう怖あつちうれあつちうよ
。とあつちうの婦あつちう女子あつちうのあつちう。うあつちうのあつちう。ああつちうるあつちうべあつちう。さあつちうかあつちう采あつちう地あつちうはあつちう生あつちうとあつちう。活あつちうるあつちうのあつちう。ああつちうのあつちう。さあつちうくあつちうが
。世あつちうをあつちう授あつちうるあつちうのあつちう。さあつちうはあつちう誰あつちうかあつちう。既あつちうよあつちうそのあつちう。譯あつちうをあつちう授あつちうけあつちうるあつちう。そのあつちう。恩あつちうをあつちう受あつちうるあつちうと

ああつちうくあつちう。物あつちうの用あつちう小あつちうなあつちう。まあつちううあつちうくあつちうとあつちうくあつちうくあつちう。ゆあつちういあつちうくあつちう。草あつちう本あつちうはあつちう非あつちう暗あつちうらあつちうりあつちう。世あつちう由あつちうありあつちうるあつちう
。をあつちうまあつちうりあつちうくあつちう。衆あつちう人あつちうをあつちうまあつちうまあつちうどあつちうつあつちうとあつちう羽あつちうをあつちうつあつちうとあつちうめあつちうくあつちう。彼あつちう山あつちうはあつちう赴あつちうれあつちう。さあつちうくあつちう
。下あつちう知あつちうてあつちう楠あつちうをあつちう伐あつちうすあつちう。くあつちうれあつちう。與あつちう猪あつちうのあつちう。樵あつちう夫あつちうはあつちう今あつちうああつちうりあつちう。用あつちう意あつちうであつちうと
。いあつちうそあつちうがあつちう。一あつちうつあつちう。擲あつちうとあつちうやあつちうをあつちうまあつちうまあつちうくあつちう。奥あつちうはあつちう入あつちうれあつちう。厚あつちう倉あつちうああつちうりあつちう。はあつちうたあつちうとあつちうをあつちう以あつちうてあつちうまあつちう
。諸あつちうとあつちうもあつちう退あつちう出あつちうりあつちう。びあつちうくあつちう。頃あつちう昭あつちうのあつちう。日あつちうの早あつちう且あつちうはあつちう厚あつちう倉あつちう二あつちう席あつちうをあつちう夫あつちう以下あつちう。野
。のあつちう。従あつちう者あつちうをあつちうおあつちうくあつちう。米あつちう管あつちう山あつちうはあつちう到あつちうるあつちう。小あつちう。蛟あつちう。松あつちう。典あつちう。膳あつちう。のあつちう。先あつちう。とあつちうりあつちう。樵あつちう。夫あつちう。はあつちう。をあつちう。集あつちう。合あつちう。
。くあつちう。伺あつちう。候あつちう。ぢあつちう。りあつちう。そのあつちう。時あつちう。頃あつちう。昭あつちう。馬あつちう。のあつちう。りあつちう。ありあつちう。くあつちう。床あつちう。几あつちう。はあつちう。尻あつちう。をあつちう。うあつちう。けあつちう。件あつちう。のあつちう。楠あつちう。をあつちう。
。向あつちう。上あつちう。とあつちう。りあつちう。枝あつちう。葉あつちう。參あつちう。差あつちう。とあつちう。りあつちう。らあつちう。びあつちう。ひあつちう。てあつちう。羊あつちう。天あつちう。をあつちう。覆あつちう。ひあつちう。榦あつちう。のあつちう。ちあつちう。サあつちう。ハあつちう。十あつちう。歩あつちう。ヨあつちう。
。てあつちう。さあつちう。日あつちう。繞あつちう。りあつちう。果あつちう。べあつちう。らあつちう。もあつちう。ああつちう。つあつちう。ざあつちう。れあつちう。ばあつちう。莞あつちう。尔あつちう。とあつちう。りあつちう。てあつちう。左あつちう。右あつちう。をあつちう。えあつちう。りあつちう。物あつちう。のあつちう。求あつちう。るあつちう。
。小あつちう。うあつちう。らあつちう。くあつちう。集あつちう。るあつちう。とあつちう。いあつちう。とあつちう。びあつちう。くあつちう。とあつちう。いあつちう。とあつちう。くあつちう。とあつちう。りあつちう。そのあつちう。人あつちう。のあつちう。德あつちう。はあつちう。ああつちう。りあつちう。とあつちう。れあつちう。又あつちう。今あつちう。茶
。亭あつちう。をあつちう。造あつちう。りあつちう。とあつちう。すあつちう。とあつちう。りあつちう。天あつちう。のあつちう。良あつちう。材あつちう。をあつちう。ああつちう。りあつちう。とあつちう。りあつちう。徳あつちう。をあつちう。りあつちう。時あつちう。をあつちう。うあつちう。らあつちう。とあつちう。りあつちう。と

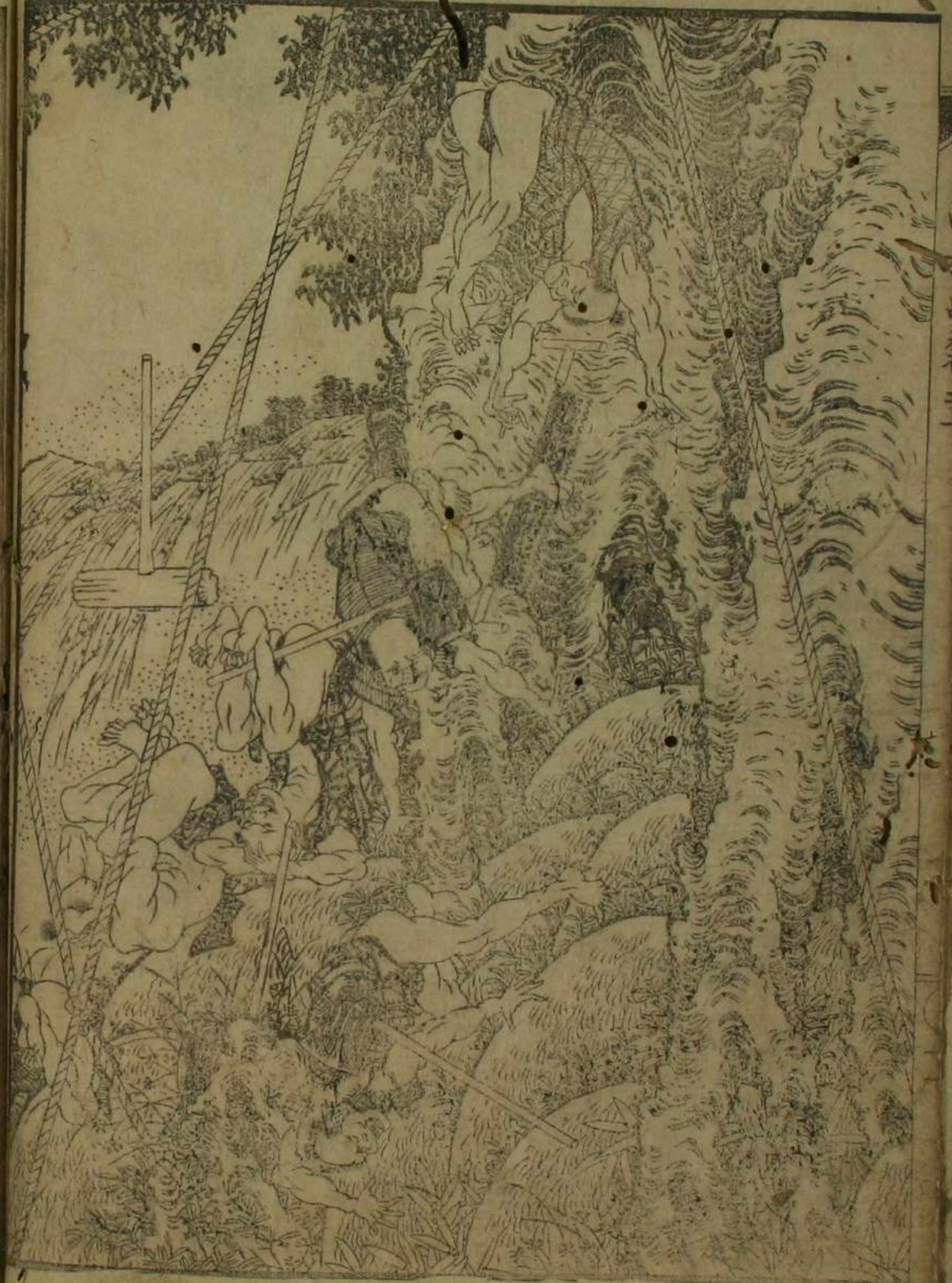


楠を斫らんとて
順昭焦夫們を
傷ふ

井原

百三十一

其二

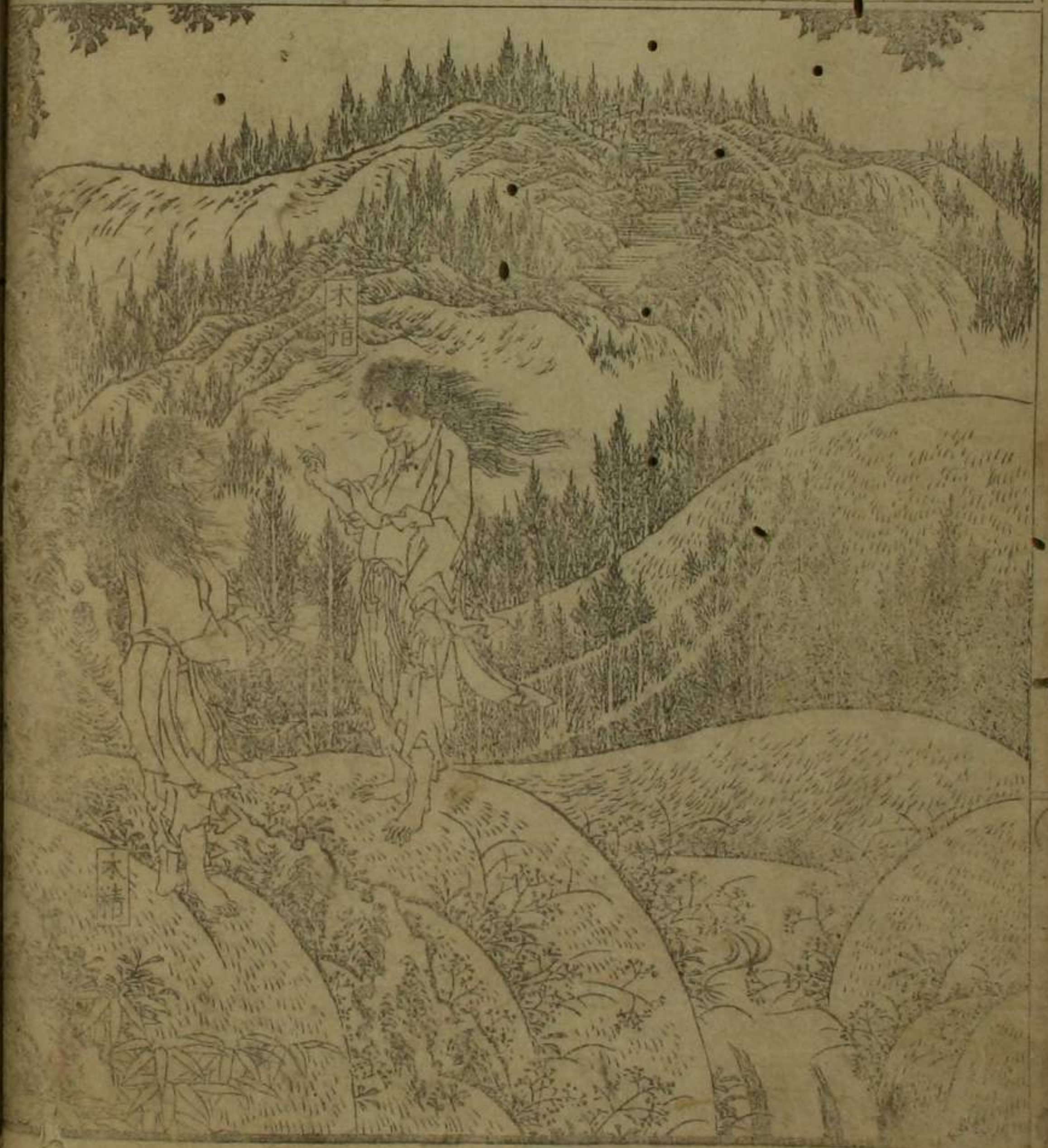


伐せしと知するふりと老醜なる樵夫三人あり。領土のほとり近う
知るまうと申す。畏りれど面あつてはえさるべしとあり。殿の御威徳を
り。この樹を伐せしと宣はるを固辭するまのぬ。この楠の昔よ
て神と崇めし。杉木推つる男もまうらむ。落葉掻く童も近づく。と
えをあつするぞ。思ふはは連を引まといふ。人の懇こま許さるを。
下は伐らしめらる。あまふとある崇あるべし。加禰幹の石より
も堅中よりええ。輒く斧もさらぬ。廣に大和の山々を索ふ
る樹はあつざる楠のまれともある。うづられば。あまより百日を限
る。放あつ。うぬぬのどもを伴ひ。外を索めべしとまうす。野の
樵夫ホも三人の雲羽が後方よりたて。あまよりたて。説の順昭すもあ
まのつとら笑ひ。伊本草鞋天の故をばい。や。樹の草鞋も
崇祀の靈驗あり。思民られを悟つ。この樹の歳移るを奇とて。遂小神
と崇れらる。鬼魅罔西の栖とある。伊ホ伐らばとく伐せり。か命
は従ふ。いさるべし。といれ。うたつ。か。引ま。と引援す。は連を丁と切れ。
左右へつと。うたれ。花。幣もさらりと散らる。樵夫ホのこの形勢をえて
戦慄す。うづらむ。枝をかひのんとて。まて人楠の袖に攀よ。枝より長
ずらる。麻索を結。看。八方へ引ま。あまのく。斧をあり揚。二の枝を丁
と打。斧の閃りと交り。成。刪られ。る木はの。鮮血を。積。
推。夫ホが面上あり。の。とええ。上る。七人瞑眩。た。や。も。撞
と。下。の。の。打。我。の。足。を。傷。れ。半。死。す。
の十餘人。墮。る。の。の。死。す。さ。す。が。勇。気。順。昭。も。の。の。体。は。古。を。死。
と。ひ。も。の。の。を。さ。る。夫。早。曉。の。を。低。し。の。の。と。ひ。つ。を。

西

米谷山小半六
木精を認る圖

卷第五十八小半六
圖を引て云木之精
を動候と名く状黒
狗の如く尾は又十
載の木をの中小虫
あり名けく買註と
いふ狀豚の如くはて
両頭あり幸かこれを
食ふ狗の肉の味の時



又上小山林あり小川
川泉あり沈理の間に
精を生す名せ必
方と云ふ狀鳥の如く
屋長と云ふ陰陽變
化の生ところあり
抱朴子小云山中の大
樹よく諸者樹の
語ありてその精の色と
雲陽といふ其色を以て
と云ふ則吉 今わの
速る本と云ふ小因



こゝろはつゆめぬと歎びその夜のぬるささうらと山をわらふ。いひの外はつて
足の運びも常よりつねに。只管は路をいそいで。佐保の庄へ降りるを。

木精の怪異

半六が妻籬は條の米谷山より。人殺死しうとけなすと。妻死むあつた。月
の暮るる。夫のまもつて。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
と聞すれば。定より。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
と望つ。明ゆく。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
常より。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
の後。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
も。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。

七が。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。

ら。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
直邊。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
仆。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
と。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
の。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
を。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
馬。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
彼。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。
一。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。あつた。いづれいづれ。

小輪の條にぞ一深念して木精のこころを威ふにやとせしむるに怪しくも
 くもつらふも。さしあれ。領主の威執をせり。伐たのりたるを。つら
 るる言をてのりて為損とあつ。世の胡虜とあつ。のりたるを。罪にがら
 した所なるにぞ。又為課あつ。とも。この宗あつ。ん。ま。が。身。の。ま。ま。と
 が。く。す。も。不。便。又。宗。あ。つ。の。も。せ。先。祖。の。楠。と。の。小。仕。く。譜。代。相。傳
 の。家。隸。あり。と。日。末。の。ひ。野。の。ひ。う。が。う。を。さ。さ。く。榮。利。を。計。して。さ。さ。が
 小。古。主。の。名。う。一。負。の。楠。を。伐。め。ん。の。名。詮。自。任。の。理。と。す。ん。末。榮。か。く
 も。め。り。の。さ。さ。ど。智。恵。才。学。う。も。及。が。た。の。世。の。人。の。分。良。福。と。さ。ひ。さ。え。時
 を。初。め。ん。こと。さ。さ。さ。ま。う。ら。ぬ。さ。さ。げ。て。さ。ひ。と。さ。り。の。め。り。と。賢。く。も。さ
 む。を。羊。六。け。も。果。ど。政。を。う。ち。掉。物。成。と。ひ。ご。と。ら。婦。女。の。生。平。う。い。小
 一の。人。も。天。の。さ。の。を。取。ざ。れ。卸。調。を。受。と。こと。と。尋。常。う。て。彼。樹。を

伐ら。崇を。稟る。とも。あ。つ。ん。は。を。り。と。す。と。た。れ。怕。る。小。足。と。ど。又。楠。の
 古。主。の。名。氏。う。れ。ん。伐。ら。と。の。り。の。思。さ。り。世。よ。又。米。氏。よ。は。る。人。の
 主。の。名。氏。と。と。米。を。食。つ。と。や。め。の。り。の。も。さ。身。ひ。と。の。乃。の。り。あ。つ。伐
 身。小。塚。と。こ。り。既。は。野。の。春。秋。の。狩。と。身。の。繼。續。に。は。狼。を。れ
 を。頼。と。さ。の。さ。も。さ。せ。め。れ。ね。と。さ。さ。う。人。さ。よ。勝。る。ま。と。を。
 世。も。ち。う。れ。ぬ。深。山。木。と。う。果。ん。の。ゆ。と。を。う。う。と。や。婦。吟。樹。と。牛
 賣。と。と。め。と。と。の。り。あ。つ。ん。筋。の。身。が。あ。つ。た。は。あ。つ。ど。何。も。打。と。る
 ても。一。回。答。と。聴。納。と。う。い。ん。と。さ。り。實。言。や。信。言。美。言。と。美。言。信
 る。と。す。愚。さ。る。の。良。茶。の。苦。れ。を。憎。と。才。あ。の。亦。人。の。諫。を。預。と。受。し
 論。後。の。日。末。う。り。さ。の。を。の。り。あ。つ。ん。果。る。ま。と。を
 今。も。諫。う。ね。と。結。よ。露。隔。る。言。の。昔。も。ち。う。れ。ぬ。の。と。と。さ。り。小。さ。ひ。と

宿所よ吸門の佐保の庄ある赤根ま六と密にやえん
べたとありて系まより願くの對面を詩くせぬと
くひびつれくその故を問ふま六の膝行顔首し
を伐らせんといふ怪異ありて果しぬと風流する
輒く彼補を伐く進へば。そのまさんたは推
典深られを心まき吟笑ひぬのり騰のちくして
と。彼樹を伐らんといふ此よ命を覆らるる本精の宗あり
博士の説よ木の精を彭侯といふ。白澤の圖よん
奔よ訣智あり。詩よべと回答するよ。羊六容を
僕よ牙の賤ををり。食言とてあめ。貴人よ對ひて
る。千載存る樹よ。本精あるとありあとも。それを伐
ふ法あるををりあねの。功のたのまらぬ。殿の人を傷
まらるるが家よ。木を伐る法を相傳也。領主の御威勢の
けるものも。百方の強敵といふも。屑と云ふ。牙と
株の楠を斫果さ。世の胡慮とありあねの。傷痛し。僕
の民とて。妻子を。領主の賜と。命を。めりて
寸忠を。用られぬ。不遇あり。及んば。と
つ。奉意まげ。小出んと。典保。く。は
と。莫大の忠。あり。た。か。た。め。る。れ。る
か。く。も。信。ぜ。し。う。為。課。と。中。の。さ。示。と。て。坐
復。ま。し。誰。の。命。の。惜。ら。ん。り。木。精。の。宗。を。惹。か。課

宿所よ吸門の佐保の庄ある赤根ま六と密にやえん

輒く彼補を伐く進へば

典深られを心まき

と。彼樹を伐らん

博士の説よ木の精

奔よ訣智あり

僕よ牙の賤ををり

る。千載存る樹よ

ふ法あるををり

まらるるが家よ

けるものも

株の楠を斫果さ

の民とて

寸忠を

つ。奉意まげ

と。莫大の忠

か。く。も。信。ぜ。し

復。ま。し。誰。の。命。の。惜。ら。ん

り。木。精。の。宗。を。惹。か。課

ととりあふ。僕立此に死すべし。又た課せし罪をり。危れをり

つちをととり。虚実を容示しぬ。いと輝る氣をまき。冬に身を給

ちて。納得し。もつ縁由を言えぬ。まふを退。直に仕て

首尾を述べ。頼昭は、それも勅うて。己の命を。朽すくわひ

あぐ。眼前ある宗は。怖れを。彼樹を斫れ。いと。畏入。兼おとと

て。羊六とせん。計詔。ゆくも。いと。彼が。隨意。りら

り。成る。試し。為課。二廩の。賞錢を

と。と。典格。宿所。退れ。まふを。領主の。仰を。説ち。汝が。一世の。没沈。よあり。どひ。損ずる

る。成就。賞錢。の。隨。と。六。額。つ。られ。を。自。僕元。未。賞。賤。を。願。先祖。河内。の。正。勝。は。は。數。代。武。夫。り。と。楠

況。没。落。の。ち。の。と。實。と。あり。て。祖父。の。と。死。り。柴。を。賣。流。某。と。い。と

も。更。は。武。士。の。志。を。う。と。あ。れ。此。度。の。恩。賞。は。舊。の。武。士。と。う

ぬ。先。祖。の。孝。身。の。面。目。を。う。と。も。う。ら。り。と。の。期。は。ま。は。り。た

は。執。り。ぬ。れ。と。希。の。典。格。兵。頭。と。の。お。り。仔細。を。汝。ら。を

の。日。より。の。樹。を。伐。る。べ。し。と。仰。ぬ。ま。六。月。の。日。が。圓。の。斎。一。て

法。を。行。ひ。第。八。日。は。至。ら。ぬ。成。る。べ。し。と。仰。ぬ。件。の。大。木。を。僕。一。己。の

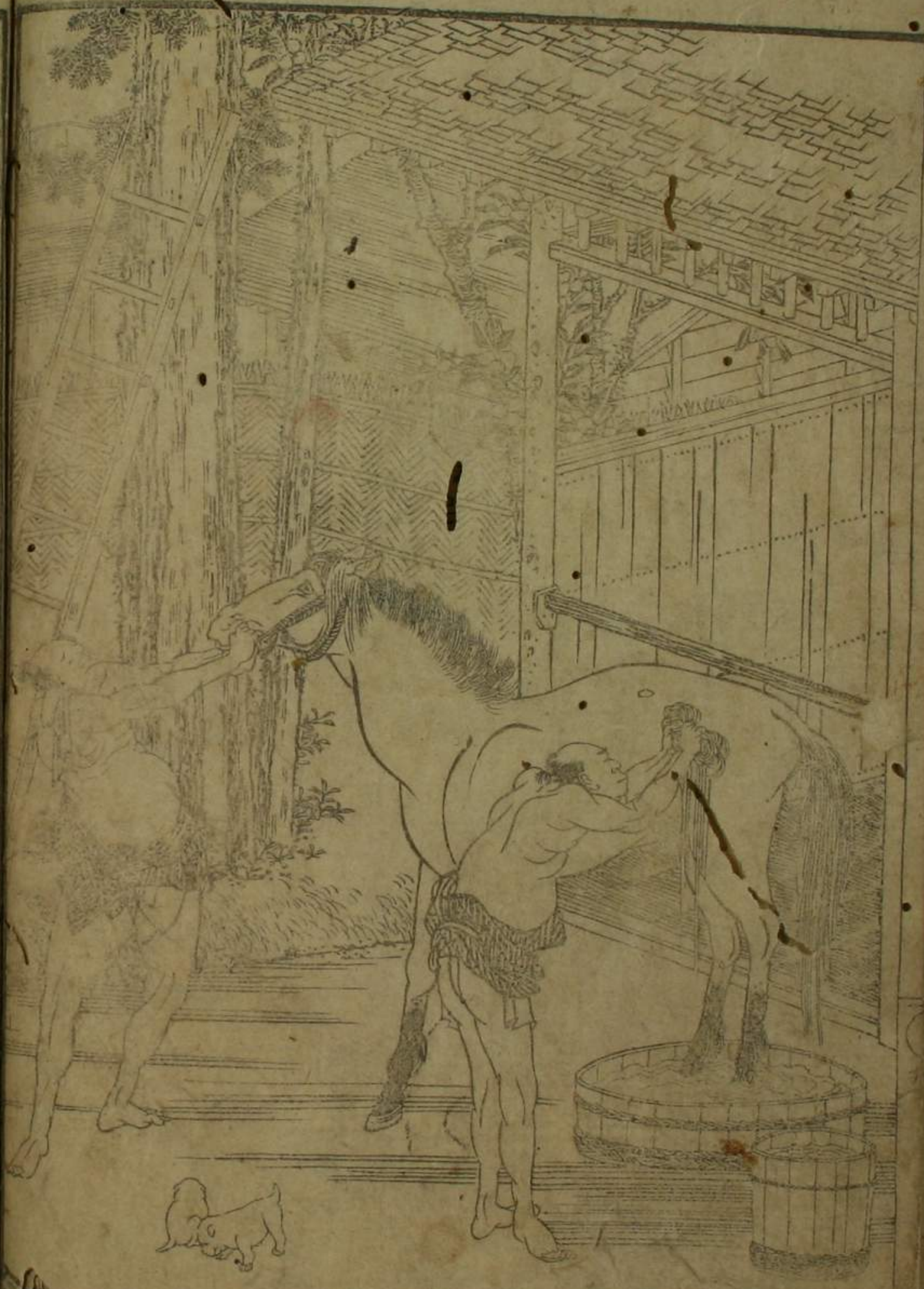
伐。ら。ば。徒。は。日。を。費。さん。致。既。は。参。り。を。入。れ。ぬ。と。の。忠。告。な。し。と。仰

と。違。う。す。る。後。は。樵。夫。亦。は。仰。せ。斫。ら。せ。と。仰。ぬ。是。の。後。は。典。格。兵。頭。に。傳。へ

て。第。九。日。め。ゆ。れ。樵。夫。亦。を。お。も。わ。ぬ。彼。は。到。る。べ。し。と。仰。ぬ。時。日。を。違

は。と。全。く。固。く。約束。し。ま。六。月。の。暇。あ。り。て。か。の。か。た。死。路。に。あ。り。り。と。仰。ぬ

は。赤。根。羊。六。の。次。の。日。より。齋。一。と。萬。目。の。射。法。を。後。に。第。七。日。め。ゆ



よ索と着る。木の上よ身を固め腰を容けを脱ぎと。丁々くるりと
斬りおろし刃を拵の柄を脱ぎ。麓へ礮と落し。伊賀路より大和
を登り。山越へ。よやあらん。脊は裏の袂も小妻木綿のや。破れし。
繪の笠。竹の杖。木よりわたる山路をたづぬ。ある盲人あり。親
ふと。二人。年より七つ。ハツをりある小女。人より。谷
より木垂。楠の叶をふり。んとする。処よ。守六より落せし。斧彼盲人
かまの上。肉けく。項をさくくと破れ。叶。一声。叫び。あつ。傍
小女と。ト。女。女の周章。夢さぬ。うら。と。吸。居。声も。多。つ。唇。ら。
死す。も。あ。く。ん。え。ん。り。り。り。詰。処。は。輪。藤。の。盤。れ。夫。を。諫。め。ら。て。あ
日の。覚。つ。り。あ。午。飯。運。ぶ。假。托。と。三。里。の。路。を。い。ろ。と。半。七。を。伴。ひ
つ。ら。く。あ。く。麓。は。ち。の。つ。吐。と。走。り。い。ろ。べ。う。れ。旅。客。が。血。は。塗。ま。て。生。ず

死も定らるる。さうさ。つ。ら。く。り。り。と。く。後。叫。ぶ。誰。の。人。の。心。中。ど。の。ん。れ。
痛く。彼。三。峽。の。夜。の。猿。腸。を。お。も。う。り。う。き。共。は。濡。れ。る。袖。の。際。より
料。割。籠。を。と。り。落。し。ま。せ。七。も。い。く。と。左。ね。り。よ。左。提。下。湊。人。と
する。小。女。の。り。り。と。あ。ら。ん。と。輪。藤。が。向。上。る。峯。の。樹。上。より。杖。を。あ。ら
さ。し。夫。の。り。り。と。あ。ら。ん。と。暁。の。は。り。り。と。あ。ら。ん。と。悲。し。く。と。此。首。の。二。人。の。声
を。揚。げ。夫。の。り。り。と。あ。ら。ん。と。わ。り。り。と。あ。ら。ん。と。猿。客。を。救。ひ。あ。ら。ん。と。叫。び。つ。る。
声。の。樹。は。響。音。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。
索。よ。と。り。推。乃。と。く。袖。を。か。り。り。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。
あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。
心。丹。を。と。り。出。し。その。は。り。り。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。
飲。せ。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。

涙をうけ拭ひし。父もさよ。此のつらき事。この世を去るべし。揚子江
のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
衣抱を受。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
小遣。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
赤根守六。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
楠の枝。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
勸解。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
何國の人。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
潜。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
人の子。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
管領家。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。

退程。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
大和物語。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
女児。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
環會。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
眼病。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
髪を剃。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
法師。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
丹波氏。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
丹波都。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
伊勢。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
相摸。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
勢。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。
義洛。世を去るべし。揚子江のほとり。誰人とも。此の世を去るべし。

大和路
丹波路
横死を
哀悼心



七

七

七



六

六

南

六

よき遠人とどひしを竹の都をよむひ出。どしどしの年杖も折せしは
出のすまじと路よ露と消さんいづまよ。ともかくともこの瘡よて存命べ
くもどつれど思愛のすうらるる。ほつとすれど磐石の息の内より悲ひ
ぬるひ。良の女児があれはうら。ハオといひど年弱よ。十一月七日の出生丹
波右衛門孝基が女児あらんと。父がよづろ書つけたる。胎帯は今もあは
女児が項よ掛さして護身囊の中よあり。又か背負し紙包の異國傳末
の樂器よ。その形元よ似れど。三條の線をうけく弾よ千石
三味線の音を發せど。鄭声よ。と味あれ。私よ三味線と名つ。羊末
秘藏するといふも。せよ稀なる人もあら。されど夫婦が別せしと。たの
三味線の撥を折再會の紀念とす。その片割れよあり。親のまゝ子と
憐れ。人の情心生音の意。しゆじとありひ子のあさんか。母よ。お母さん。

符ともるるべられ。どしどしハ女児よと。せよ。をがよ。たのひ。この三味線
つら。骸と共よ瘞。賜あり。後の世よ。樂器の行々目もあつと。
朽ね名のを。吸れんと。ひ遺と言のま。今も大和の城下郡。三味田の
里よ佐保の庄丹波市と。三の御を。三條の線よ。是れ。是れ。縁な
ら。へ。論。後。痛。く。せよ。形。死。さ。り。の。限。せ。れ。は。勝。せ。し。も。あ。り。
ら。も。と。ら。ひ。し。う。り。ひ。よ。ろ。ろ。た。い。人。と。あ。り。の。深。世。そ。う。遺。と。の。ひ。う。ら。
ら。盲。人。を。あ。や。ま。く。よ。介。り。く。殺。ら。れ。仙。人。の。其。塔。よ。ん。憶。と。つ。歎。せ。
孫。に。成。り。と。連。う。る。され。も。木。精。の。宗。り。と。ど。つ。バ。人。の。う。ら。ま。さ。せ。は。
や。この。徒。果。あ。り。とも。女。児。の。立。正。橋。か。つ。とも。娘。とも。守。守。言。く。る。た。は。
の。跡。せ。よ。ある。母。の。環。會。し。つ。らん。空。夢。と。り。れ。と。り。か。天。も。由。
緒。あ。る。人。よ。て。作。ら。る。る。よ。一。子。の。ま。せ。も。今。と。後。の。十。才。よ。あ。り。ね。を。い。は。る。る。の。

